

2021年9月 初秋号 第205号	飛鳥 かわら版 ASUKA KAWARABAN	発行所 飛鳥出版室 発行人 永野 正将 〒780-0945 高知市本宮町65-6 電話 088-850-0588 e-mail: info@asuka-net.jp http://www.asuka-net.jp
---	--	---



コスモスの 花遊びをる 虚空かな 高浜虚子

暑かった今年の夏も9月に入ると朝夕は過ごしやすくなりました。
可憐な秋桜の揺れる風景もうすぐ！季節は秋に向かっていきます。

新聞余話⑮	……………大澤重人	2	出版物紹介	……………	6
おのころじま奮染記 23	……………田島征彦	3	A-TOOL	……………	7
いろいろかいろ 三	……………安藝真一	4	印刷屋さんの「すったもんだ」	……………永野正将	8
キルギスタンからコンニチハ ㉑	……………氏原名美	5	わが家の太郎 ㉒	……………永野雅子	8

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

東京五輪開幕の前日のことでした。

いつものように朝5時半に目覚め、真つ先にスマホを手にしてヤフーのニュースを確かめました。最後にツイッターの検索語の「トレンドランキング」もチェックします。重要ニュースの端緒みたいなものがつぶやかれ、大手マスコミが報じる前の前兆がうかがえるからです。

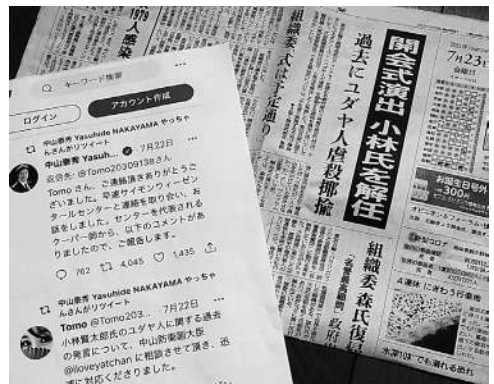
上位にあった「ユダヤ人大量惨殺ごっこ」というのが気になり、クリックしました。五輪開閉会式のディレクターを担当する男性劇作家が、お笑いコンビ「ラーメンズ」として活動しているときに揶揄発言をして笑いを取っていた過去が暴かれ、ネット上で話題になっているようです。五輪開会式を巡っては、楽曲の作曲を担当するミュージシャンが障がい者への過去のいじめが問題視され、辞任したばかりです。

出勤して午前中に再びランキングを見たら、1位の「惨殺ごっこ」に続き、「防衛副大臣」が2位に入っています。なんだろう。劇作家の揶揄発言を知った副大臣が米国のユダヤ人権団体に連絡したことを誇らしげにツイッターで明

新聞余話 ⑮

大澤 重人

「新聞」でなくて「旧聞」



演出担当の解任を報じる東京五輪開幕当日の朝刊と、防衛副大臣のツイッター画面のコピー

かしていることを知りました。惨殺ごっこ発言は言語道断ですが、日本の安保を担うポストの人物が外国の組織に直接通報することも異常です。

この人権団体は即座に非難声明を出しました。昼前に新聞社のネットニュースで、劇作家が大会組織委員会に解任されたことを知りました。素早い対応です。欧米にとってナチスのホロコーストは、日本で言えば拉致被害者をお笑いのネタにするようなものです。開会式を翌日に控えていたことと、国際的な非難を危惧してわずか半日での解任処分となりました。

元新聞記者として残念だったのは、ネットニュースだけは新聞記者が発信したもの、紙の新聞ではこの動きにリアルタイムで関与できなかったことです。

ネットがない時代なら——。どこかの新聞が朝刊で特ダネを報じ、各紙は夕刊で追いかけます。テレビもワイドショーが後追いに走り、外電などでも報じられ、海外の反応が届き、翌日の朝刊で解任が報じられるというのが、伝統的なパターンです。ネット時代の今は、情報の伝播スピードが早すぎて、わずか半日で情報が「消費」されるのです。

世の中の動きに、新聞本来の朝夕刊という旧来の「時計」では追いつかなくなっているのです。「新聞」ではなく、今や「旧聞」なのです。

従来の報道を続けていては新聞に勝ち目はありません。速報性や同時性では劣りながらも、なぜこういう人物がディレクターに選ばれ、過去の発言が選定時になぜ精査されなかったのか。問題のお笑い公演では観衆の笑い声が起こっていました。なぜホロコーストに日本人はそれほど敏感でないのか、など多角的に背景を掘り下げる必要があります。日本人の人権意識の乏しさは、連載企画のテーマにも十分なりえます。事象の表面を追いかけるよりも、ずっと面倒で時間も労力も取られる取材です。しかし、そこまで踏み込まないと、情報が瞬時に世界を駆け巡る時代に読まれる記事は生まれないのではないのでしょうか。

Ⅱ 渡来人歴史館(大津市) 専門員、元毎日新聞高知支局長
※新刊「咲くや むくげの花」
朝鮮少女の想い継いで(富山房インターナショナル刊、1980円・税込み)。

(3) かから版

母の胎内から感染した腸炎で、ぼくら一卵性双生児は、出生の時から重病を患っていた。セイちゃんより、ぼくの方が重くて、生まれ出てきてから泣き声を上げるのに、かなり時間がかかったようだ。それが原因で、ぼくらは、運動神経が極端に悪かった。その上、感情や感性にも異変をおよぼしたのかも知れない。

手や足を動かす脳の機能が破壊されていたんだろう。動作が鈍く、ひよろひよろと動いていたようだ。それがどうしたわけか、物心がつく頃から二人とも絵を描くのが好きだった。

高知の山奥で育ったのだが、土の道に棒切れで絵を描いて遊んでいた。小学校へ入学すると、他の学科に興味がなく、ただただ図工の時間を待ちわびていた。それなのに、図工の時間が始まる

おのころじま 奮染記

ふんせんき

田島征彦

23. 型染 ①おーいよいよい



間もなく、ぼくは大声を上げて泣きわめくのだった。

当時、画用紙は、一人に一枚ずつ配られ、それに好きな絵を描くのだ。画用紙は、質の悪い破れ易いものだったからクレパスを撫でるように、塗らねばならないのに、ぼくは、興奮して質の悪いクレパスを握りしめると、力いっぱい白い紙に挑んでいったのだ。ひと塗りで紙は破けた。それでも描き続けようとするから、画用紙は揉みくちやになってどうにもならない。ぼくは大声を上げて泣きじゃくった。泣くことでしか自分を慰めることができなかった。大声を上げて泣いているうちに、

「おーい、よいよい、おーいよいよい…」

と、規則正しいリズムになってくるのだった。

最初のうちは、あつげにとられて静まり返っていた教室は、クスクスと笑い声や、からかいの聲が上がるようになる。すると、離れた席からセイちゃんが走ってきて、

「ユキちゃん！おーいよいよいと言わんと、ちゃんと、ワーン ワーンと泣きや！」

（つづく）

たじま・ゆきひこ（染色家・絵本作家）

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じごくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。沖縄の子どもたちを主人公にした「やんばるの少年」の次には沖縄戦を題材に、子どもたちに、戦争のことを、平和の大切さを伝える絵本を制作中。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名



チボリの夜

安藝眞一

遠い日の記憶が、夢のように、立ち上がる。一九六一年の夏、初めての欧州への旅のこと。

降り立ったのはデンマークのコペンハーゲン。街も村もバターとミルクの匂いがした。宿の裏小路にバラついた小雨をくぐって走り込んだ朝の配達のミルク缶のこすれる音が音楽の様に曇り空に溶け

て昇っていく。戦火を受けていない街並のいたる所に時の流れがあつて、夕焼けの中を歩いていく穏やかな気分が続いていく。

七夕の夜、チボリという遊園地の門をくぐる。夜というよりは宵のあかりは白夜の所為だろうか、立ち現われる案内板や看板の垢抜けたデザインと造り、えらび抜いた材質と細工のすばらしさに、ただ見とれ、歩く道のつくりも、ベンチも、遊びの道具、花々の展示もレベルを越えた構成で、気がつく走りまわる子供達は少なく、カップルが群れている。酔うように歩くうちに、やっと夜が降りて来て、出口に向う小道の暗がりに小柄な男が立って何か声を上げている。近くに寄ると、私の顔を見つめて「×○△□」とデンマーク語で声を立てる。意味も判らずなおも男に寄ると再び「△○×▽!」判らぬ言葉に首を振ると小さな顔が私の耳元に寄って、「ノミノサカス」と言う。私が無言で見つめると思いつめた様な男の顔が近づき「ノミノ サカス」と云い放つ。声に日本語の温度があり、男の肩に手を置いて「蚤の?」という

と、男笑ってうなずき「蚤のサカス」と答える。金をまさぐり払って、テントの幕をくぐる。四帖半位の丸い布貼りのテントにランプの灯り、先客の男が八人程、テーブルを取り囲み明るい光の輪の中を、見つめている。小さな柱二本にわたされた赤色の紐の中心にピンクの羽毛が動いて、その羽の根元に蚤がつながれている。蚤の網渡りと判った時に、頭の中の何かがこわれて、遮断する何かの衝撃を感じた。蚤が渡り終えると客の男達は声を上げて拍手する。卓の中心に座った親方が息をつめて取り出し卓の中心に金色の小さな石を置く、近寄ってよく見ると金色の細工された二輪車で7ミリの角の大きさ。古代ローマで走った、あの映画「ベン・ハー」でチャールトン・ヘストンがまたがった大群衆の中を走り抜けた興奮の繋駕レースの二輪車が極小の大きさでランプの光を受けている。その精緻な造りに声も出ない。親方は金色の他に色の違う二輪車を四台並べ、五つになった車に、それぞれの蚤の身体を糸でしばりつける。客の誰もが息を呑んで声も出ない静寂と夜気が忍び入る。音楽を合図に横一線に並んだ繋駕レースがスタートし15センチ程の長さ

のトラックを動きはじめた。声を呑んだ見物の眼の中を、五匹の蚤達は懸命に二輪車を引き、時間を引きずって、金色が一着となり勝負がついた。解きはなれた様に見物は口々に何かをわめき拍手が揺れる中、親方は一着の蚤の糸をほどき、つまんで自分の手の甲に乗せ、ゆつくりと血を吸わせている。この血が出演料なのか、他の蚤はじっと待っている。朦朧とした頭の中で、これ程の微細なサカスを思いついたのは、どんな人物だろうかと思えもないのに頭をめぐらせていた。出し物は少なかったのに、二時間程の曲芸に酔い痴れていた気分をかかえて出口に向う。流星に夜も更けて、あの呼び込みの男の姿はなく、帰り道を急ぐ人々の群れに押されて見返えるサカスの小屋は夜の闇に吸われる様に消えて姿もなかった。

夢のように思い出すあの事を追いかけている。六十年も前の情景が深いトンネルの様に続いていて、出口の明かりを追えばあの呼び込みの小さな男がまだ立っていると思ひ込んでいます。

了



ところ変われば 一家族の名前

氏 原 名 美

うじはら・なみ

越知町出身。北海道大学卒。キルギス共和国ビシケク国立大学（旧称ビシケク人文大学）教授。「キルギスタン」はキルギス共和国の通称の一つ。

められることが条件だが、姓を「小野レノン」、名を「洋子」など、いわゆるダブルネームにすることも可能なのだそう。キルギスでは姓の選択だけでなく、脱ロシア語化の意味もあって改名自体が難しくない。

十六歳以上の国民必携身分証明手帳がカード制に変わり始めた頃のこと、「先生、新しい名前になりました」と学生が報告にきた。ロシア式にヌルベック・アルマゾヴィチ・オスモノフ、「オスモン家のアルマズの息子のヌルベック」という名前だったのを、カード登録を機にアルマズウウル・ヌルベック、「アルマズの息子のヌルベック」とキルギス式にしたのだと言う。新しい名前にはロシア式のフルネームにあった「オスモン家の」に当たる部分がない。女性も同様で、例えば、ボロトクイズ・ナルギザというように、父の名前の後に「娘」を意味するクイズをつける。要するに、父の名が名字なのだ。最近ではウウルナシクイズなしでアルマズ・ヌルベックとかボロトク・ナルギザのような名前も増えている。

キルギスは姓ではなく名前中心の社会だ。いつも互いに名前で呼

び合っていて友人同士が互いの姓を知らないことなどしょっちゅうだ。学科室でも学期末書類を作成するときなど、手元に名簿がないと大変だ。「二年生のジャマのフルネーム教えて！」「アクイルクイズ・ジャミリヤー」「パキットの名字は？」「ジユマグーロフだったと思う」といった会話が飛び交う。

もつとも年長者を呼び捨てにはできない。年上に対しては、日本語の世界と似ていて、親族名称が呼称あるいは敬称になる。男性ならおじさんとか兄さんに相当するバイケ、女性にはおばさんとか姉さんにあたるエジェ、ずっと年配の人には父とか祖父にあたるアタと母や祖母を意味するアパで呼びかける。アジズ・バイケ、ナスゲリ・エジェなど、アキラおじさん、マリコおばさんのように響いて親近感が湧く。

学生が日本留学の申請書に氏名を書く時、キルギス式の名前なら姓の欄にアルマズウウル、名の欄にヌルベックと記す。本国連絡先を父親にすれば、その欄に「オスモノフ・アルマズ」と書く。ヌルベック君の受入先担当者は少し混乱するかもしれない。「お父さんと名字が違うんですか？」

父と子だけではない。もともとキルギスでは婚姻に際して夫婦が同じ姓にするか、どちらも姓を変えないか、自由に選べる。そして、結婚したからといって姓を夫の姓に変えるキルギス人女性も減多にない。だから、同じ屋根の下に住む父親と母親と子供が異なる姓を名乗っていても何の不思議もない。我が娘の夫の両親も姓が違う。夫婦別姓どころか同居の孫たち（次男の娘と息子）は古いしきたりを復活させて父方の祖父の名前を姓として登録しているから、孫の立場で言えば、「おじいちゃん、おばあちゃん、パパ、ママ、そして私たち、みんな名字が違うよ」という家族なのだ。しかし、一家の結束は固く、仲睦まじく暮らしている。戸籍制度などないおかげだろうか。

（※ヌルベック他、登場人物は仮名です。）

キルギス情勢概説資料（在キルギス日本国大使館）

<https://www.kge.mb-japan.go.jp/files/100131388.pdf>

キルギス日本語チャンネル

— Kyrgyz Nihongo Channel —

<https://www.youtube.com/channel/UC6ayIJ-365qQ8TFMxqdlSuA>

UC6ayIJ-365qQ8TFMxqdlSuA

ジョン・レノンの本名はジョン・ウィンストン・オノ・レノンだ。婚姻にあたって妻の姓を二つ目のミドルネームとして登録したのだという。妻も自分の名字をミドルネームにしてヨーコ・オノ・レノンというのが正式な名前らしい。日本でも国際結婚の場合は、相手側つまり外国籍の配偶者の姓に変更してもよし、元の姓のままでもよい。さらに、家裁の審判で認

大澤重人さんが出版

咲くやむくげの花

—朝鮮少女の想い継いで

かわら版で「新聞余話」を連載してくださっている大澤重人さんが、「咲くやむくげの花」を出版なさいました。

この本は、1997年に飛鳥から出版された絵本「むくげの花の少女」と出会った著者が、400年前の秀吉の朝鮮戦略で土佐へ連行され、望郷の念を抱いたまま異国で生涯を閉じた機織り少女に導かれ、日本と朝鮮との歴史のかかわりを、あらゆる分野の取材と自らの体験を交えて探った本です。

そして、偏見を見直し、よりよい友好の関係を築く大切さを訴えています。



著者・発行者：大澤重人
定価 1,980円
(本体1,800円+税10%)
発行所 株式会社山房インターナショナル

出版物紹介

中内かず子句集 青葉騒



著者・発行者：中内かず子
四六判 218頁
私家版

1983年より俳句をはじめた著者の第二句集。「青玄」「蝶」同人。

第一句集からずいぶん長い年月が過ぎました。スタートの遅かった私はもう晩年です。ご指導いただいた、たむらちせい先生をお見送りして私も残りの時間を意識しはじめました。そんな時、思いがけなくコロナ籠りの日ができ急に思い立ち、第二句集をまとめる事が出来ました。

句集名は「青葉騒して戦争を知らない木」に拠っています。教育の中で今の日本の子ども達は本当の歴史の事実を教わっていないと思います。そんな若者を木に例えまし

「あとがき」より

黒原部長お疲れさまでした！

当社で約16年間営業一筋で活躍してくれた、黒原部長が今年7月末で定年退職されました。持ち前のきつちりした性格と何事にも気が利くことで、沢山のお客様にかわいがっていただきました。

一見怖そうな風貌で近寄りづらい雰囲気ですが、根はとてもやさしくて社内の飲み会等ではとてもおちゃめな姿をみせて場を盛り上げてくれました。

これからは趣味の釣りや金魚(土佐金)を育てながら、愛する奥様と仲良くお過ごしください。(タバコは一日も早くやめてくださいね：奥様の声)

長い間、本当にお疲れ様でした。そしてありがとうございました。(川田 記)



.....
ホームページの **作成 編集 管理** が
誰でも 驚くほど簡単に!



新時代のCMSが誕生しました!

A-TOOL
エイツール

「A-TOOL」はみなさまの声から誕生した、オンラインのホームページ作成サービスです。インターネットにつながる環境ならば、いつでもどこでもホームページの画面上で作成や編集を行うことができ、HTMLやCSSといったホームページを作成するための知識も必要ありません。



「A-TOOL」はお客さまの声から誕生しました!

「ホームページを作成したことがない」「HTMLなどの知識なんてまったくない」
そんな方でも簡単に楽しみながらホームページの作成ができる
「えい(良い)ツール」です。

えい(良い)ツールあるよ!



イラスト制作: 田村

YouTube

動画でCheck!



※動画はWEBサイトでもご覧いただけます。

「A-TOOL」の
利用者が
“ぞくぞく”と
増えています!

少しの修正を
いちいち業者に
頼みにくい

業者に依頼
すると高い!

知識はないけど
自分たちで情報発信
したい!

自社で簡単に
更新したい!

サイトに
スピード感が
必要!!

自分たちで
ホームページを
作り込みたい!

自社で簡単に
ネットショップを
運用したい!

更新作業を
特定の社員に
頼りっぱなし



<https://a-tool.jp>

全て「A-TOOL」が
解決します!!
詳しくは飛鳥まで!

TEL: 088-850-0588
MAIL: info@asuka-net.jp

印刷屋さんの「すったもんだ」

代表取締役 永野 正将



“飛鳥かわら版”も本号で205号となりました。これも一重に応援してくださる皆様のお陰と心より感謝申し上げます。

実は“かわら版”は過去に1度だけ2色印刷に挑戦した事があったのですが「何か違うよね(´・Д・｀)」ということで、それ以降、モノクロ印刷を貫いてまいりましたが、ここきて「フルカラーがいいのでは？」や「もっと有意義な情報を発信しては？」「若い人でも楽しめるコンテンツを入れては？」など、社内から意見があり、一念発起し、次号の新年号より大幅なりニューアルをいたします！

これまでのコンテンツはしっかりと継承しつつ、新しいコンテンツを盛り込んだり、社員の人となりを感じて頂ける内容や、不肖私の趣味に関する記事などをフルカラーでお届けしたいと、従業員一同張り切って進めておりますので、ぜひご期待ください。

今後とも“飛鳥かわら版”をよろしく願いいたします。

わが家の太郎

52

騒動

永野 雅子



枝に首輪が掛まって助けて！

その日は、ある会で私が発表する事になっていて、朝8時半には家を出るつもりでいた。

前の晩、原稿もチェックして忘れ物がないように準備をして床につく。

ところが夜中の1時、2時半と大声で起こしてくれる。3時半に起きたとき、見れば太郎の部屋の中にうんちがいっぱい。なんとということ！

そのままにするわけにもいかず、膝をついて作業をするために、もんぺに着替えて始末をし、拭き掃除も済んだ頃は4時を過ぎていた。その時点で起きればよかったが疲れてもいたし、床に入った。

朝、目覚めて時計を見ると8時半。目覚ましは止まっている。というより私が無意識に止めたのだろう。

どうやって準備をしたか記憶がないが、とにかく9時には会場に到着したから我ながらあつぱれ！

あたふたした割には落ち着いて、ミスもなく発表を終えた。家に帰ると太郎は昨夜の騒動はどこへやら、冷風機の風を受けてグーグーいびきをかいて眠っている。

最近をよくお漏らしをするようになつて、とうとう下の世話も加わった。

7月7日で16歳になった太郎は、目が見えないのに部屋に閉じ込めると騒ぐ。仕方なく庭に放すと今度はなぜか狭い隅っこに頭を突っ込んで大声をあげる。

息子はエアコンの室外機や倉庫の下、果ては植木の下まで囲いやネットをして入り込めないようにするが、それでも無理やり時間をかけて隙間を作り、潜り込んで出られなくなつて

大騒ぎ。

その都度、安定剤や睡眠剤を好きな「ちゅーる」に混ぜて飲ます毎日。いかげんにしてほしいと、夫の写真に向かって「お父さん、わがままに育ててくれたからこの有り様、どうしたらいいですか！」と毒づくが写真はおだやかな眼差しで私をみている。

考えてみれば太郎が夫と暮らしたのは5年、あとの11年は私との生活。ならば責任は私か。

昔、親友がお義母さんの介護で下のお世話をしながら「うんこは、何度も続けて言っていたら幸運になる」と、話してくれたことがあったけれど、大事な役を無事に果たせたこと、元気で仕事も出来ていること、すべて幸運なのだと思うと少しは救われた気分になる単純な私である。